

「鬼糞祭り-前編」

—初稿—

2025/3/11

脚本 太郎

〈人物表〉

姫島 晴彦	（15）	中学三年生
淀川 文夏	（15）	中学三年生
高城 充	（53）	村長
綾部 隆	（35）	教師
姫島 梨華	（40）	晴彦の母
姫島 茂	（40）	晴彦の父

1. 山道（昼）

一台の車が走っている。

2. 車内（昼）

運転席に姫島茂（40）、助手席に姫島梨華（40）、後部座席に姫島晴彦（15）。晴彦は苛立ちと混乱が顔に出ている。

晴彦 「なあ、二人とも……いい加減どこに行くのか教えてくれよ」

茂と梨華、虚ろな表情。二人ともヘッドフォンを付けている。左イヤパッドに「背徳精霊」右イヤパッドに「凌辱天狗様万歳」とそれぞれ書いてある。二人、ぼそぼそとうわごとを言っている。

茂 「あの村から逃げられるわけなかったんだ……」

梨華 「でもまさか、今頃になって……」

晴彦、大きく溜息を吐く。

晴彦 「昨日から一体、どうしたって言うんだよ」

3. 高城邸・庭（昼）

立派な日本家屋。

高城充（53）と、側に控えるジャージ姿の男たちが立っている。男たちの手には塩の載った皿。

晴彦たちを乗せた車が入ってくる。

高城とジャージの男たちが車に近付く。

車が停車。まず茂と梨華が同時に出てきて、少し遅れて晴彦が降りてくる。

高城 「久しぶりだな。村民管理番号二四三七と二四六九」

直後、男たちが晴彦たち三人に塩を掛ける。

激しく咳き込む三人。

茂と梨華が咳き込みながらヘッドフォンを外す。

高城 「ガキの方は初めましてか。ようこそ辱辱村へ」

晴彦、涙目で高城に食って掛かる。

晴彦 「いきなり何すんだよ」

高城が苛立たし気に反応。

高城「あ？」

晴彦、僅かに尻込み。

高城「このガキ、何て口のきき方だ。まさか俺が誰か分かってねえのか？」

高城、露骨に威圧する目つき。

晴彦、訝し気に、

晴彦「誰だよ？」

高城、一步前に出て胸を張る。

高城「俺だよ」

晴彦「だから誰だよ」

高城「（早口かつ大声で）うるせえ喋んな自殺しろ」

高城、晴彦を殴り飛ばす。地面に倒れる晴彦。

晴彦、頬を押さえて忌々し気に高城を睨み上げる。

高城「何でもかんでも大人に訊いてねえでちつとは自分で考えろ、糞ハゲが」

高城、茂と梨華を睨む。

高城「てめえらも、一体どういう教育してんだ？ 鬼糞は自分のガキも碌に調教できねえのか？」

晴彦「鬼糞？」

晴彦、困惑の顔。

茂と梨華、同時にひれ伏す。

梨華「申し訳ありません、村長」

晴彦「え、村長？」

晴彦、驚愕の顔。

高城、気を良くしたように豪笑。

高城「てめえら二人の身柄は今夜の鬼糞祭りまでこっちで預かる。このガキは……そうだな」

高城、少し考えてから陰湿に微笑む。

高城「どうせもうすぐ墮人になる身だ。実地研修ってことで、支給予定の学校にぶち込んでおくかな」

ジャージの男たちが両側から晴彦を押さえる。

晴彦「は、放せ。何する気だ」

高級車が停めてある方に引きずられていく晴彦。

高城 「ガキつてのは案外鬱憤ため込んでるからな。結構ハードな現場だと思うぜ？」

高級車に押し込まれる晴彦。

茂と梨華が申し訳なさそうに晴彦を見ている。

梨華 「ごめんね、晴彦」

晴彦 「え」

高級車のドアが閉められ、発車する。

高城 「せいぜい今日からは、もっと申し訳なさそうに生きるんだな（下品な馬鹿笑い）」

4. 分校・教室（昼）

生徒数二十人ほどの教室。生徒たちはゲームをしたり、いかに寝っ転がっていたり、大声をあげていたり物を投げたりと、学級崩壊の様子。

綾部隆（35）、教壇の上にて、苛立たし気な様子で、四つん這いで俯いた淀川文夏（15）に座っている。淀川の身体は震えており、荒い息をしている。制服はボロボロ。手の指の幾つかには包帯が巻かれている。

首には「堕人」と彫られた首輪をはめられている。その顔は泣きはらしている。

綾部 晴彦、茫然とした様子で後ろの方に突っ立っている。「何が実地研修だ。鬼糞祭りでの鬼祓いの儀が済んでいないのなら、コイツは穢れの温床じゃないか。まったく迂闊に殴れもしない」

綾部、淀川に苛立たし気に座り直す。呻き声を上げて体勢を崩す淀川。

綾部、舌打ち。

綾部 「この椅子最近ガタつくな、もう寿命かな？ また燃やしちまうか？」

綾部、踵で淀川の腹を蹴る。

淀川、えずき、咳き込みながらどうにか体勢を整える。

その際スカートの裾から僅かに火傷の痕が見える。

淀川 「ごめんなさい、ごめんなさい」

綾部 「椅子は喋んねーだろ」

綾部、淀川の頭を叩く。

晴彦、手を挙げ、堪えかねたように口を開く。

晴彦 「あの……先生」

教室中の視線が晴彦に向く。

綾部、咂然とした表情。

晴彦、気まずそうに手を下ろす。

晴彦 「俺の席は？」

綾部、びつくりした表情。

綾部 「あるわけねーじゃん」

晴彦もびつくりした表情になる。

それに対して綾部もまたさらにびつくりしたというようにわざとらしくのけぞった仕草。淀川が呻く。

綾部 「てかこの状況で開口一番それとか、お前だいぶズレてんな」

綾部、少し考えて、

綾部 「ひよつとしてこイカレてんのか？」

自分の股間を指さす。

晴彦 「……は？」

綾部 「違うか？　じゃあ、ここか？」

綾部、虚空を指さす。

晴彦 「どこですか？」

綾部 「違うか？　じゃあ、ここか？」

綾部、左乳首を指さす。

晴彦、沈黙。

綾部 「それともここか？」

綾部、鼻を指さす。

晴彦 「先生……面白くないですよ」

綾部、咂然とした表情。

直後に見る見る怒気に染まる。

綾部 「じゃあどこがイカれてたらそんなに馬鹿になるんだよ答えろ糞泥人形がよ！」

綾部、言いながら淀川の腹を踵で三度蹴る。

淀川がえずいて何度も咳き込む。

晴彦 「普通に頭とかじゃないんですか」

綾部 「自分で言ってるんじゃないよ」

綾部、左胸の前で手でハート型を作る。

綾部 「てめえらに自傷なんて許されねえんだよ。他人から傷つけられて苦しむのが弱者の義務だろうが苦しんで死ぬ」

綾部、ウィンクして、ハート型を前後に何度か動かす。

晴彦 「なんか台詞と動作対応してないな」

綾部 「うるっせえ、文句ばっか言ってるんじゃない、てめーはコオロギか」

晴彦、眉を顰めて、

晴彦 「コオロギってそんな比喻に拔擢されるほど文句言いがちなんですか？」

綾部 「黙れ揚げ足を取るな、死ぬ」

綾部、大げさな身振りで投げキスをする。

綾部 「うわ汚ね」

綾部 「俺はこう見えて人一倍繊細で傷つきやすいんだよ。もっと配慮しろ尊重しろ敬愛しろ嫌なら自殺しろ。てか俺より幸せな奴は自殺しろ。俺より一粒でも多く幸せを噛み締めてる奴は全員自殺しろ」

綾部、淀川の上で泣きながら駄々をこね始める。拳が淀川の背を打ち、足が腹を打つ。淀川は苦し気に呻き、咳き込む。

晴彦 「それより幸せの数え方の単位って『粒』で合ってるんですか？」

直後、チャイムが鳴る。

綾部、瞬時に泣き止み、落ち着く。

綾部 「堕人と駄弁ってたら終わっちゃったよ授業」

綾部、淀川の手を思いきり踏んで立ち上がる。淀川が悲鳴を上げる。

日直の生徒「起立」

生徒たちが立つ。

日直の生徒「我らが背徳精霊凌辱天狗様から幸せの波動を受け取

る波動浴の時間です。それでは皆さん、気持ちを落ち着けて……ばんぎーい」

生徒たち全員と綾部が万歳してジャンプする。

直後、皆一斉に着地。ドスンと鈍い音。

綾部・全生徒たち「背徳ー、しあわせー、ばんぎーい」

晴彦はドン引きしている。

淀川は教壇にうずくまり、爪が割れて出血した指をおさえて泣いている。

綾部と全生徒たちは目を閉じてしばらく黙祷をしている。

日直の生徒「着席」

生徒たち、何事もなかったように席に座る。

綾部が教壇を降りる。淀川はまだうずくまって泣いている。

綾部「四限は体育だな。学期末だしレクで良いよ。人間ダーツ

と人間サッカー、どっちがやりたい？」

教室中で軽い喚声が沸く。

淀川の顔が蒼白になる。

続く